

35歳から79歳までの全国の男女600名に聞いた 『お墓のゆくえー継承問題と新しいお墓のあり方ー』 ～合葬式のお墓に入ってもよいと考えている人は約3割、一方、散骨への抵抗感は強い～

第一生命保険株式会社（社長 渡邊 光一郎）のシンクタンク、株式会社第一生命経済研究所（社長 長谷川 公敏）では、35歳から79歳までの全国の男女600名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

この程、その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

《調査結果のポイント》

家庭内の死者祭祀の実態 (P. 2)

- 仏壇や神棚の保有率は大幅に減少しているものの、お墓参りをする人の割合は8割前後と、あまり変化していない。

「先祖」とは誰か (P. 3)

- 最も多かったのは「自分の親や祖父母などの近親者」(73.2%)。「自分の家系の初代または初代以降すべて」は半数程度。

誰と一緒にのお墓に入りたいか (P. 4)

- 「先祖代々のお墓」(39.0%)がトップ。第2位は「今の家族で一緒に入るお墓」(25.0%)。

無縁化防止対策についての考え (P. 5)

- 男性は「寺や教会などが子孫に代わって管理する」方法がトップ。女性は「期限付きのお墓にして、継承する人がいなければ期限後に合葬する」方法が最も多い。

お墓が無縁化する可能性 (P. 6)

- 「いつかは無縁墓になる」(50.3%)と「近いうちに無縁墓になる」(4.1%)を合わせると、無縁化すると考える人は5割強。

合葬墓についての考え (P. 7)

- 「生前に知っている友人や家族などと一緒にであれば、自分は利用してもよい」「知らない人と一緒にでも、自分は利用してもよい」を合わせると、合葬墓に入ってもよいと考えている人は約3割。

散骨についての考え、散骨希望者の理由 (P. 8、9)

- 「自分はしたくないが、他人がするのは構わない」と回答した人は過半数(55.1%)。「葬法としては好ましくない」と考えている人は14.7%。
- 一番多い理由は全部散骨、部分散骨とも「自然にかえられるから」。第2位は「お墓参りで家族に迷惑をかけたくないから」。

＜お問い合わせ先＞

㈱第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当 (田代・新井)
TEL. 03-5221-4771
FAX. 03-3212-4470

【アドレス】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>

☆本冊子は、当研究所から季刊発行している『ライフデザインレポート』Spring 2010.4およびSummer 2010.7をもとに作成したものです。当該レポートは、左記のホームページにて全文公開しております。



《調査の実施背景》

第二次世界大戦後の1948（昭和23）年に新民法が施行され、家族の概念は、これまでの家父長制の直系制家族から夫婦制家族へと移行しました。たとえば相続財産については、現行の民法では、兄弟姉妹で均等に相続するのが原則となっています。しかし墳墓の継承については、民法第八九七条によると「慣習に従って」定められるとされています。明治民法では、家督相続人である長男子が継承者であったことにかんがみると、現行法でも家督相続が慣習として存続しているといえます。

しかし、昨今では、こうした枠組みの妥当性が問われています。

民法で規定する先祖祭祀の継承がもたらす問題の一つに、家族によって管理・継承されない死者のゆくえが挙げられます。離別シングル、生涯未婚者、子どものいない夫婦など、継承者がいないという問題に直面する人が増加しているほか、マクロ的にみても、高齢化により死亡者数が増加する反面、少子化の進展で、祭祀の担い手が減少することは明らかです。

こうした背景のもと、今回の調査では、人々の墓参行為の背景にある意識を探るとともに、継承の問題や新しい形態の墓に対する生活者の考えをアンケート調査から明らかにします。

《調査の実施概要、回答者の特性》

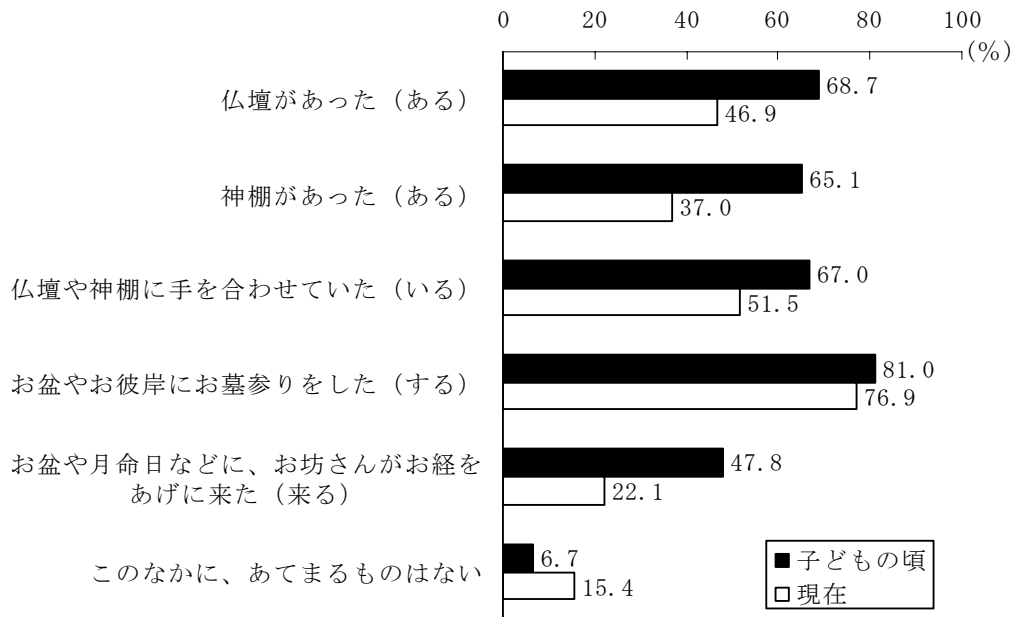
1. 調査地域と対象 35歳から79歳までの全国の男女600名
2. サンプル 第一生命経済研究所 生活調査モニターより抽出
3. 調査方法 質問紙郵送調査票
4. 実施時期 2009年9月
5. 有効回収数 584名（有効回収率97.3%）
6. 回答者の属性

	35～49歳	50～64歳	65～79歳	不明	性別合計
男性	96人 (33.6%)	93人 (32.5%)	97人 (33.9%)	0人 (0.0%)	286人 (100.0%)
女性	98人 (32.9%)	100人 (33.6%)	99人 (33.2%)	1人 (0.3%)	298人 (100.0%)
年齢層合計	194人 (33.2%)	193人 (33.0%)	196人 (33.6%)	1人 (0.2%)	584人 (100.0%)

家庭内の死者祭祀の実態

仏壇や神棚の保有率は大幅に減少しているものの、お墓参りをする人の割合は8割前後と、あまり変化していない。

図表1 家庭内の死者祭祀の実態(子どもの頃と現在の比較)



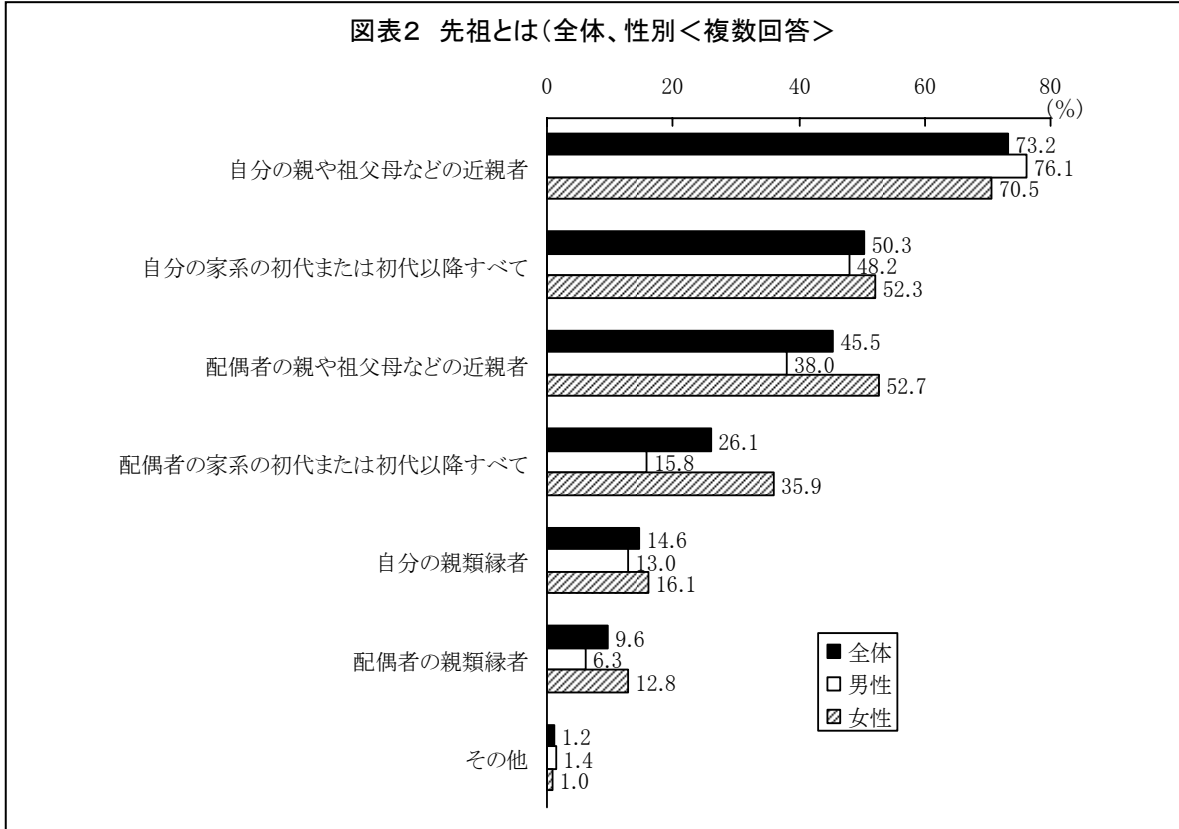
はじめに、家庭内における死者祭祀の実態を調査対象者の子ども時代と現在とで比較しました。仏壇や神棚の現在の保有率は20ポイント以上も減少していましたが、特に神棚の保有率の減少が顕著でした(図表1)。

また「お盆や月命日などに、お坊さんがお経をあげに来た(来る)」割合も、子どもの頃には47.8%と半数近くありましたが、現在では22.1%に大きく減少しています。

その一方で、「お盆やお彼岸にお墓参りをした(する)」人の割合は、子どもの頃も現在もほぼ変化していないうえ、回答率は8割近くに達しています。墓参り行為は、現在においても国民的行事として定着している様子がうかがえます。

「先祖」とは誰か

最も多かったのは「自分の親や祖父母などの近親者」(73.2%)。
「自分の家系の初代または初代以降すべて」は半数程度。

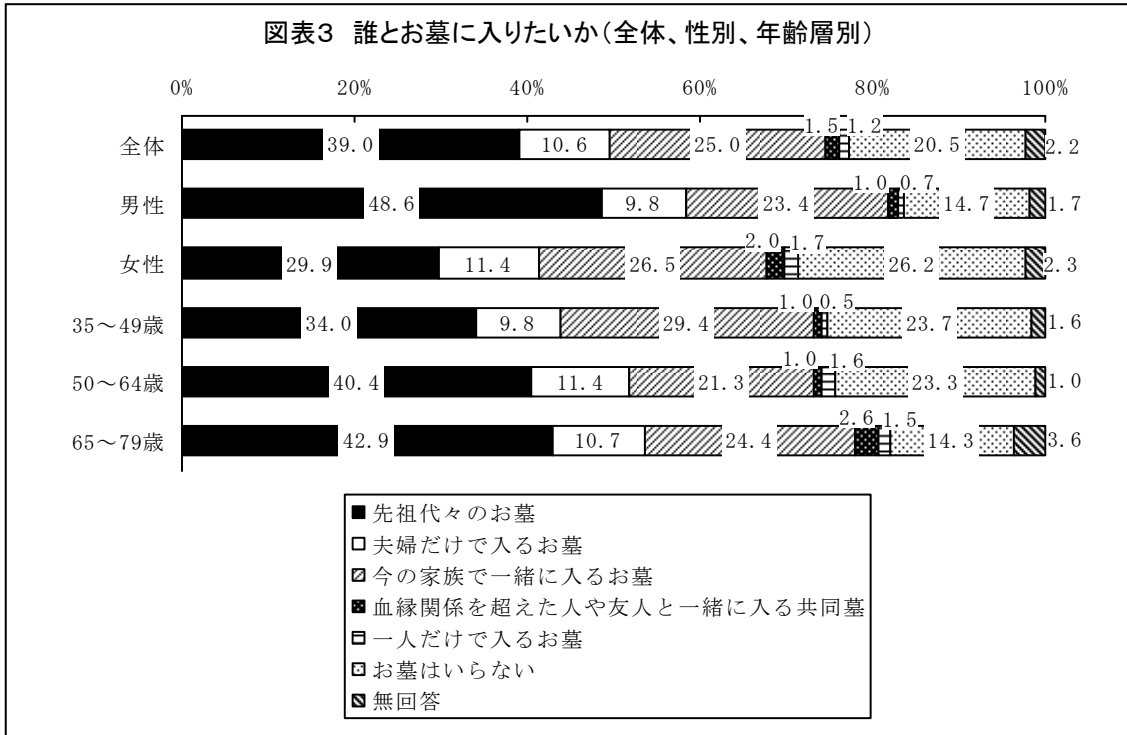


次に、「〇〇家之墓」「〇〇家先祖代々之墓」の家墓が主流のわが国にあって、墓参対象でもある「先祖」とは、私たちにとって誰なのでしょう。そこで調査対象者に複数回答を求めたところ、最も多かったのは「自分の親や祖父母などの近親者」(73.2%)で、「自分の家系の初代または初代以降すべて」(50.3%)を挙げた人は半数程度にとどまっています(図表2)。

性別でみると、「自分の親や祖父母などの近親者」や「自分の家系の初代または初代以降すべて」では男女で特徴はありませんが、「配偶者の親や祖父母などの近親者」や「配偶者の家系の初代または初代以降すべて」では、女性の回答率が男性を大きく上回っていました。このことから、女性ではむしろ、自分や配偶者の親や祖父母など、自分にとっての近親者といった先祖観を持っているのではないのでしょうか。

誰と一緒にのお墓に入りたいか

「先祖代々のお墓」(39.0%)がトップ。
第2位は「今の家族で一緒に入るお墓」(25.0%)。



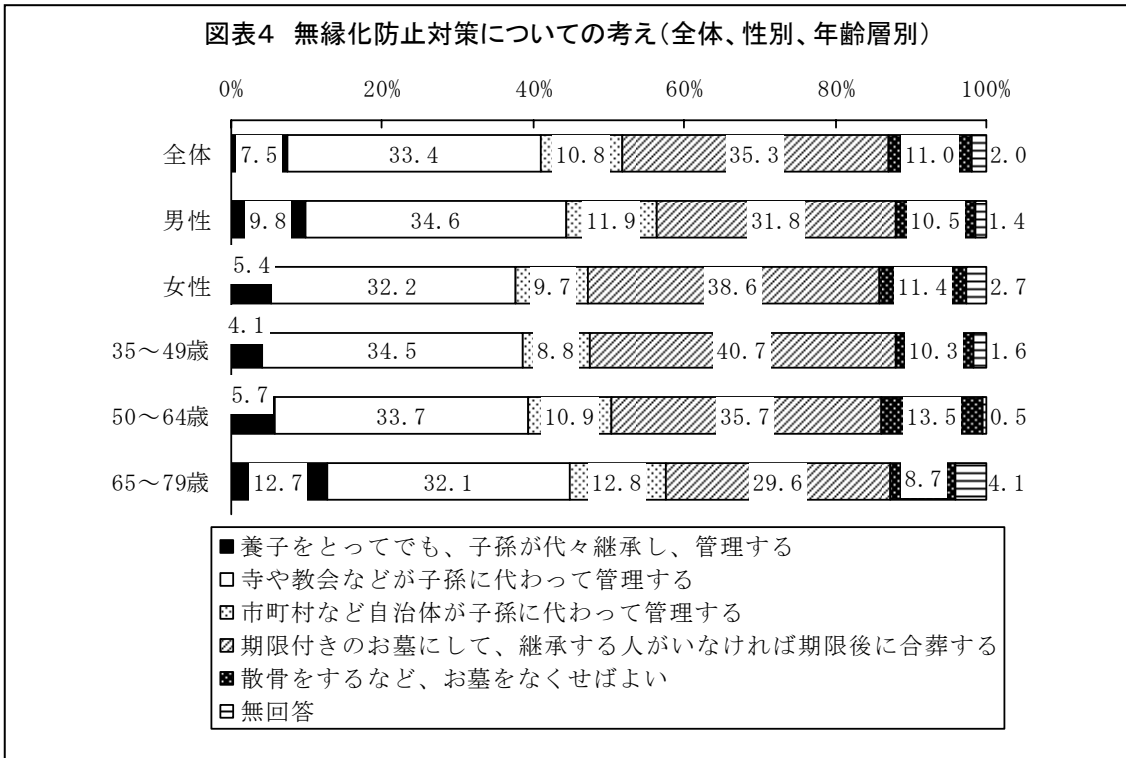
次に誰と一緒にのお墓（納骨堂を含む）に入りたいかたずねました。全体では「先祖代々のお墓」が39.0%と最も多く、次いで多い「今の家族で一緒に入るお墓」(25.0%)を14ポイントも上回っており、家墓志向の人は少なくありません(図表3)。しかし一方で、「お墓は知らない」と回答した人も20.5%いました。

性別では、「先祖代々のお墓」を希望する人は、男性では48.6%いたのに対し、女性では29.9%と、20ポイント近い差がありました。また女性では、「お墓は知らない」と考える人が26.2%もいましたが、男性では14.7%にとどまっており、総じて男性はお墓に対して保守的な考えを持っていることがわかります。

年齢層別では、年齢が高い層では「先祖代々の墓」を選択する人が多く、「お墓は知らない」と考える人が少ないのですが、64歳以下では、約4人に1人が「お墓は知らない」と考えているうえ、35～49歳では、「先祖代々の墓」と「今の家族で一緒に入るお墓」とがほぼ二分されていることから、若い世代や女性では、墓に対する意識が多様化しているといえます。

無縁化防止対策についての考え

男性は「寺や教会などが子孫に代わって管理する」方法がトップ。
女性には「期限付きのお墓にして、継承する人がいなければ期限後に合葬する」方法が最も多い。



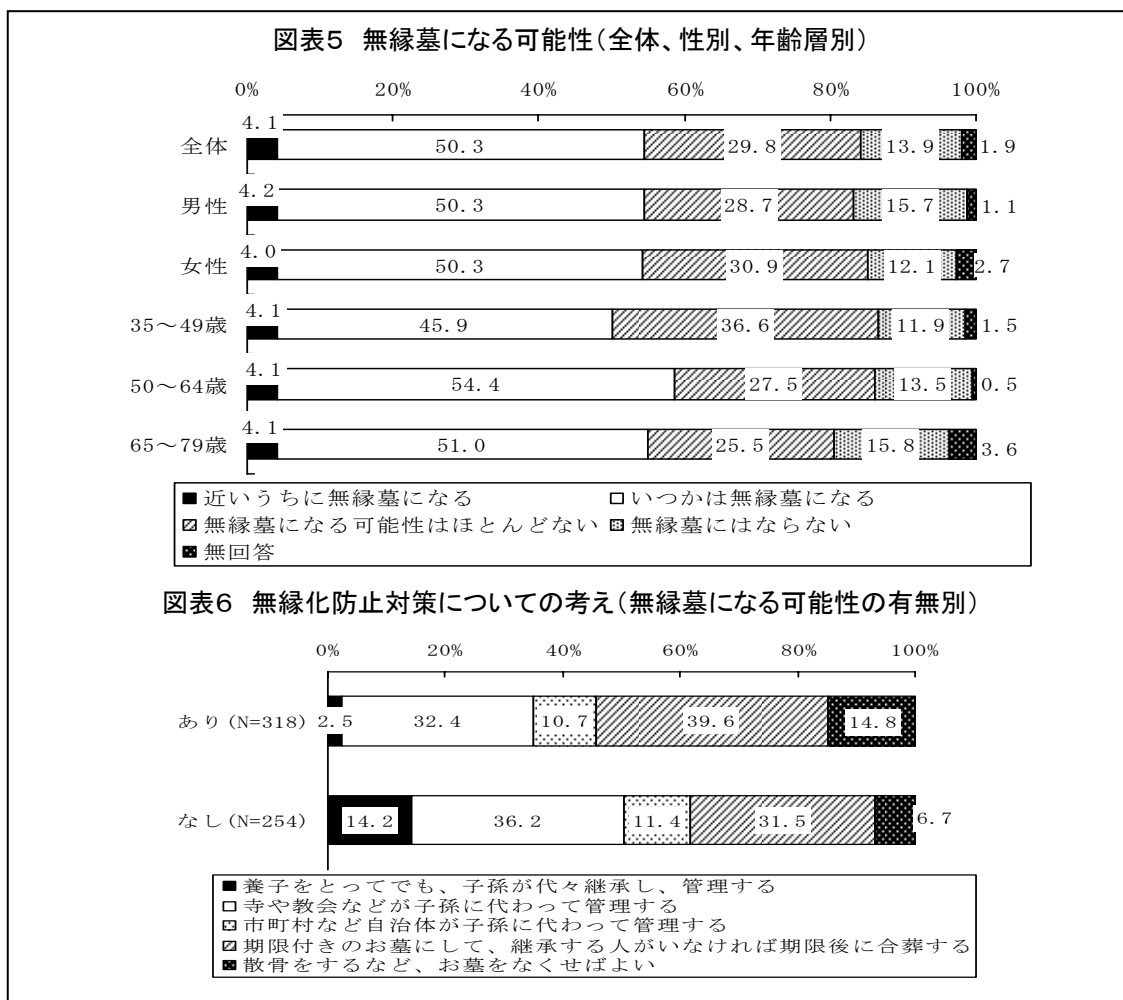
継承する人がいない無縁墓が今後、増加していくという問題に対処するために、お墓はどのように維持管理されるのが好ましいと思うかたずねました。「期限付きのお墓にして、継承する人がいなければ期限後に合葬する」方法を挙げた人が 35.3%と最も多くなりましたが、「寺や教会などが子孫に代わって管理する」方法を挙げる人（33.4%）とほぼ二分されました（図表4）。

性別で見ると、男性では「寺や教会などが子孫に代わって管理する」方法を挙げる人が「期限付きのお墓にして、継承する人がいなければ期限後に合葬する」方法を挙げる人より多くなりましたが、女性では「期限付きのお墓にして、継承する人がいなければ期限後に合葬する」方法を挙げる人の方が多いという結果になりました。

年齢層別では、「期限付きのお墓にして、継承する人がいなければ期限後に合葬する」方法を挙げる人の割合は、年齢が高い層では少なく、35～49歳では 40.7%いるのに対して、65～79歳では 29.6%と 10ポイント以上の差があります。一方、「養子をとってでも、子孫が代々継承し、管理する」方法を挙げる人は、年齢が高い層では多く、65～79歳では 12.7%と 1割を超えていましたが、35～49歳では 4.1%にすぎません。

お墓が無縁化する可能性

「いつかは無縁墓になる」(50.3%)と「近いうちに無縁墓になる」(4.1%)を合わせると、無縁化すると考える人は5割強。

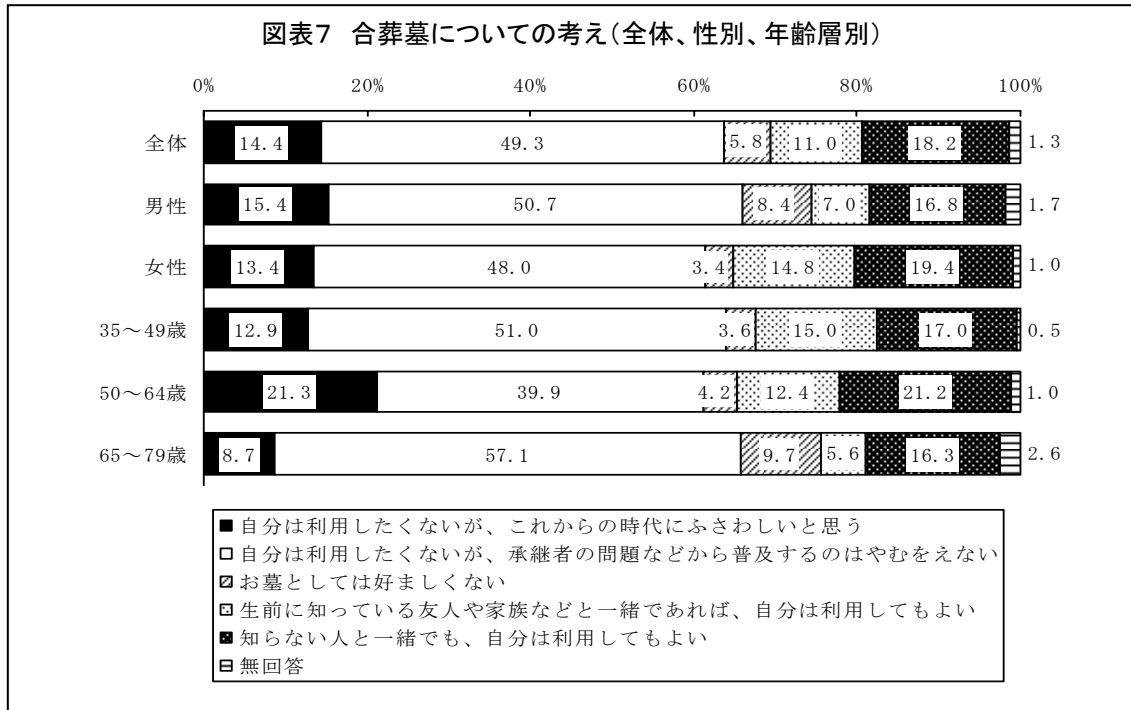


実際に自分のお墓が無縁化するというかたずねたところ、「いつかは無縁墓になる」と回答した人は50.3%と半数に達し、「近いうちに無縁墓になる」(4.1%)と回答した人を合わせると、無縁化すると考える人は54.4%もいました。一方、「無縁墓にはならない」と回答した人は13.9%にすぎませんでした(図表5)。

次に無縁墓になる可能性の有無別にみってみました(図表6)。無縁化する可能性がないと思っている人(「無縁墓になる可能性はほとんどない」+「無縁墓にはならない」)では、「寺や教会などが子孫に代わって管理する」「市町村など自治体が子孫に代わって管理する」といった、墓の永続性を志向しているのに対し、無縁化する可能性があると思っている人(「近いうちに無縁墓になる」+「いつかは無縁墓になる」)では、「期限付きのお墓にして、継承する人がいなければ期限後に合葬する」(39.6%)や「散骨をするなど、お墓をなくせばよい」(14.8%)など、必ずしもお墓の永続性を志向しない回答が過半数を占めています。

合葬墓についての考え

「生前に知っている友人や家族などと一緒であれば、自分は利用してもよい」「知らない人と一緒でも、自分は利用してもよい」を合わせると、合葬墓に入ってもよいと考えている人は約3割。



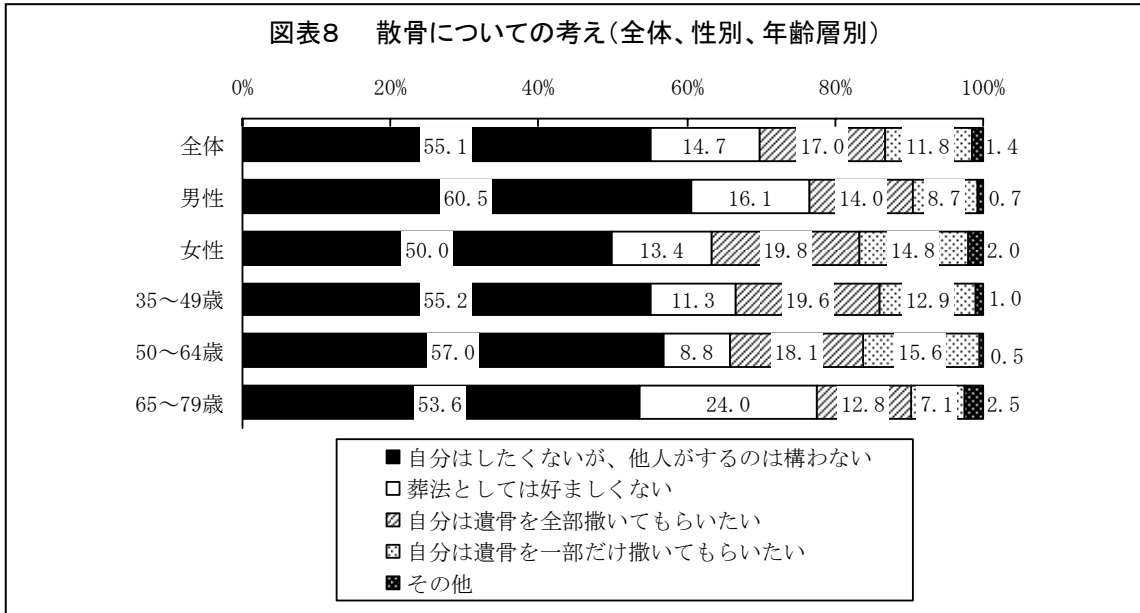
そこで、血縁や婚姻関係を超えた人たちで一緒に入る共同のお墓（合葬式のお墓）についての考えをたずねたところ、「お墓としては好ましくない」と回答した人はわずか5.8%で、「自分を利用したくないが、承継者の問題などから普及するのはやむをえない」と考えている人が49.3%と半数近くになりました（図表7）。また「生前に知っている友人や家族などと一緒であれば、自分は利用してもよい」「知らない人と一緒でも、自分は利用してもよい」と考える人を合わせると、29.2%の人は合葬墓に入ってもよいと考えています。

これを性別でみると、合葬墓に入ってもよいと考えている女性は、「生前に知っている友人や家族などと一緒であれば、自分は利用してもよい」（14.8%）、「知らない人と一緒でも、自分は利用してもよい」（19.4%）と、合わせて34.2%になりましたが、男性では同23.8%と、合葬墓に入ってもよいと考える人の割合は10ポイントほど少なくなっています。

年齢層別では、合葬墓に入ってもよいと考えている人は、64歳以下では合わせて3割以上でしたが、65～79歳では21.9%（「生前に知っている友人や家族などと一緒であれば、自分は利用してもよい」5.6%＋「知らない人と一緒でも、自分は利用してもよい」16.3%）にとどまりました。「お墓としては好ましくない」と考える人（9.7%）や「自分を利用したくないが、承継者の問題などから普及するのはやむをえない」と考える人（57.1%）が、64歳以下に比べると多くなっています。

散骨についての考え

「自分はしたくないが、他人がするのは構わない」と回答した人は過半数(55.1%)。「葬法としては好ましくない」と考えている人は14.7%。



次に、海や山に遺骨を撒く散骨についてたずねたところ、「葬法としては好ましくない」と考えている人は14.7%で、「自分はしたくないが、他人がするのは構わない」と回答した人が55.1%と過半数を占めました(図表8)。

一方、「自分は遺骨を全部撒いてもらいたい」(17.0%)、「自分は遺骨を一部だけ撒いてもらいたい」(11.8%)を合わせると、散骨をしたい人は28.8%になりました。

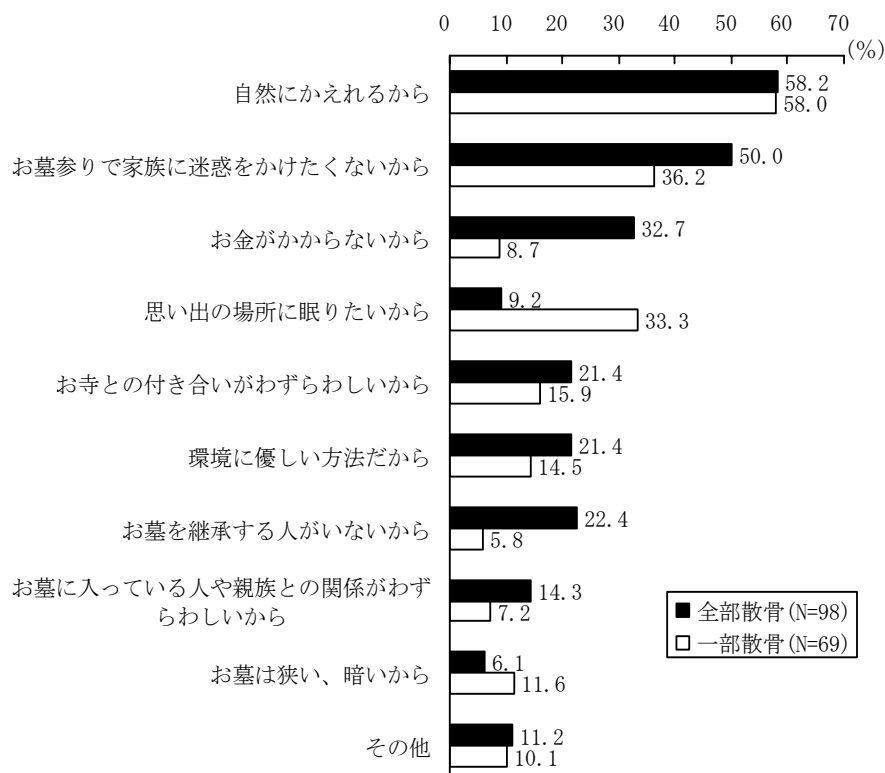
これを性別でみると、男性では「自分はしたくないが、他人がするのは構わない」と回答した人が60.5%もあり、女性の50.0%を10ポイント以上上回っていますが、女性では散骨をしたい人が34.6%（「自分は遺骨を全部撒いてもらいたい」19.8%+「自分は遺骨を一部だけ撒いてもらいたい」14.8%）と、男性の22.7%（「自分は遺骨を全部撒いてもらいたい」14.0%+「自分は遺骨を一部だけ撒いてもらいたい」8.7%）より10ポイント以上多くなりました。

年齢層別では、65～79歳では「葬法としては好ましくない」と考える人が24.0%もいて、散骨をしたい人は19.9%（「自分は遺骨を全部撒いてもらいたい」12.8%+「自分は遺骨を一部だけ撒いてもらいたい」7.1%）にとどまりましたが、64歳以下では、「葬法としては好ましくない」とする人は1割程度で、散骨をしたい人は3割を超えていました。つまり、散骨を希望するかどうかは性差もありますが、65歳以上と65歳未満とでは、散骨を葬法として好ましいと思うかという感覚自体にも違いがみられました。

散骨希望者の理由

一番多い理由は全部散骨、部分散骨とも「自然にかえられるから」。
第2位は「お墓参りで家族に迷惑をかけたくないから」。

図表9 散骨したい理由(3つまで選択)



注：分析対象は、「自分は遺骨を全部撒いてもらいたい」「自分は遺骨を一部だけ撒いてもらいたい」と回答した人。

さらに、「自分は遺骨を全部撒いてもらいたい」「自分は遺骨を一部だけ撒いてもらいたい」と考える散骨希望者に、その理由をたずねたところ、「自然にかえられるから」がどちらも過半数と最も多く、ついで「お墓参りで家族に迷惑をかけたくないから」となりました(図表9)。

しかし、3位以下で回答率が20%を越えている項目は、全部散骨か、一部散骨かで異なっており、全部散骨では「お金がかからないから」(32.7%)、「お墓を継承する人がいないから」(22.4%)、「お寺との付き合いがわずらわしいから」(21.4%)、「環境に優しい方法だから」(21.4%)の回答率が多いのに対し、部分散骨では「思い出の場所に眠りたいから」(33.3%)という理由が多くなっています。つまり、全部散骨を望む人は、従来の墓から脱却したいという思いがあるのに対して、部分散骨を望む人は、散骨自体に良いイメージを持っているのではないかといえるでしょう。

《研究員のコメント》

今回の調査では、自分のお墓が将来、無縁化しないと思っている人は1割程度しかいませんでした。よって墓をどう継承していくかは、多くの人が共有する問題であることが明らかになりました。

こうした実情を反映してか、血縁を超えた人たちで入る合葬墓については、「お墓としては好ましくない」と回答した人はわずか5.8%で、抵抗感は低いといえます。「生前に知っている友人や家族などと一緒であれば、自分は利用してもよい」「知らない人と一緒でも、自分は利用してもよい」と考える人は、64歳以下では3割以上、女性では3分の1以上を占めており、家墓にこだわらない考え方も若い世代や女性を中心に多くなっていました。

散骨についても、全体の2割近い人は、遺骨を全部撒いてもらいたいと思っているほか、女性や若い層では、お墓は不要だと考えている人が4、5人に1人もいましたが、その背景には、従来の家墓から脱却したいという思いがあることが浮き彫りになりました。

とはいえ、「先祖は私たちを見守っている気がする」「お墓に行くと、亡くなった人に会える気がする」という価値観は、日本では老若男女問わず根強く、また故人祭祀としての墓参行為も国民的行事として定着しており、少なくとも、残される者にとってのお墓は、生きる原動力として大きな存在であるといえます。

それを踏まえたうえで、子々孫々での継承が困難になっている現代社会において、これからの墓はどうあるべきなのでしょう。墓の無縁化を防止する方策としては「期限付きのお墓にして、継承する人がいなければ期限後に合葬する」方法と「寺や教会などが子孫に代わって管理する」方法とに全体としては二分されましたが、夫婦だけで入るお墓や今の家族で一緒に入るお墓を希望する人では、お墓の永続性よりも、期限付きを志向する傾向がみられました。

ところで、ここでは触れませんが、今回の調査結果から、お墓の永続性よりも、家族に死後もお参りしてもらえろという確証こそが死の不安を軽減する可能性も示唆されました。人々の先祖観が変容した昨今、お墓の永続性をどう担保するかではなく、自分が死んだらここに葬られ、子や孫がそこにお参りしてくれるのだという確証を担保することが、そこに入るであろう人にとって、死の不安を軽減させることにつながるという構図なのです。

お墓の望ましいあり方は、そこに入る人、それをお参りする人（残される者）、双方の観点から考える必要があります。どうお墓を継承していくのかという永続性の観点だけではなく、どのような墓であれば死の不安の軽減に寄与できるのかという観点も、墓地政策を考えるうえで重要なのではないのでしょうか。

(研究開発室 主任研究員 小谷みどり)